音読

短歌のリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしましょう

年

名前

短歌３（明治時代以降）　短歌３で音読するのは、明治時代以降に作られた短歌です。情景や、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

金色（こんじき）の　ちひ（い）さき鳥の　かたちして
銀杏（いちょう）ちるなり　夕日の岡（おか）に　（与謝野晶子（よさのあきこ））

秋の夕日に照らされた、丘の上のイチョウの木から、まるで金色をした小さな鳥が舞うように、葉がはらりはらりと散ってゆく。

白鳥（しらとり）は　かなしからずや　空の青
海のあを（お）にも　染（そ）まずただよふ（う）　（若山牧水（わかやまぼくすい））

白鳥は、ひとりで悲しくはないのだろうか。空の青さにも海の青さにもとけ合うことなく、その白い姿のままただよっている。

東海（とうかい）の　小島の磯（いそ）の　白砂（しらすな）に
われ泣きぬれて　蟹（かに）とたわむる　（石川啄木（いしかわたくぼく））

東の方の小島の海岸で、さまざまなことが頭に浮かび、悲しみに涙を流しながら、私はかにとたわむれている。

たらちねの　母がつりたる　青蚊帳（あおがや）を
すがしといねつ　たるみたれども　（長塚節（ながつかたかし））

久しぶりにふるさとへ帰った夜のこと、母が私のためにと青がやをつって、ねどこを用意してくれた。少したるんでいたけれど、すがすがしい思いで眠ることができた。

読んだ回数（○で囲む）	
1	11
2	12
3	13
4	14
5	15
6	16
7	17
8	18
9	19
10	20

	よい姿勢	すらすら読む	短歌の暗唱	意味が言える
私の評価（◎・○・△）				
先生の評価（◎・○・△）				

（◎　とてもよい　　○　よい　　△　もう少し）